

徘徊演劇「よみちにひはくれない」

作・菅原直樹

●登場人物

神崎（男、三十代）
定国（男、九十代）
移住者（女、四十代）
周藤（女、四十代）
ミホ（女、八〇代）
和田（男、三十代）
案内人（女、二十代）
通行人（女）

徘徊演劇とは、観客が俳優とともに実在の商店街を歩きながら演劇を鑑賞していく。本作は、和気町駅前商店街を舞台として書かれた。

【受付会場】

開演。

案内人が現れる。

案内人「今日は徘徊演劇『よみちにひはくれない』にご来場いただき、誠にありがとうございます。

（「携帯電話、音の出る電子機器は電源からお切りください」等のアナウンス）

徘徊演劇は、劇場で椅子に座って観る演劇とは異なりまして、お客様に商店街を歩いて演劇を楽しんでいただきます。わたしは案内人として、みなさんを演劇の世界へご案内いたします。

（「体調を崩された方がいらっしゃいましたら、係りの者にお申し付けください」等のアナウンス）

それでは、この物語の登場人物の神崎くんが和気駅に到着する時刻ですので、駅の改札で出迎えたいと思います」

観客、案内人の誘導に従って、和気駅へ。

【和気駅】

和気駅の改札。

中から神崎が出てくる。大きなリュックを背負っている。
神崎、改札を出ると、目の前に広がる和気町の景色に見入る。
遠くに和気富士。

神崎、横断歩道を渡り、駅のロータリーへ。
案内人、観客、神崎の後を追う。

ロータリーのベンチに定国が座っている。煙草を吸っている。
神崎、定国に気づき、立ち止まる。しばらくして、

神崎「……じいちゃん！」

定国「ん？」

神崎「定国のじいちゃんだよね」

定国「ん？」

神崎「おれ、おれ」

定国「……おれおれって」

神崎「神崎」

定国「……神崎」

神崎「和気高の前の写真屋の、神崎」

定国「ああ！ わかった」

神崎「よくじいちゃんの家に遊びに行ったじゃん」

定国「あの、まさか、……ガキ太郎の、しんちゃんか？」

神崎「そうそう、しんちゃんしんちゃん」

定国「……お前。こんな大きくなって、誰だと思ったがん」

神崎「20年ぶり。20年ぶりに和気に帰ってきました」

定国「20年ぶり！ あのとときのガキ太郎かあ。まあ、顔は白かったな、おめえは」

神崎「そうそう、相変わらず白いです」

定国「男前とはいえんけど、顔は白かった。美少年いうたらおべんちゃらになるけど……」

神崎「うわあ、じいちゃん、覚えててくれたんだ」

と、二人は抱き合う。

定国「お前のことはよく覚えとる。ここら辺のガキ太郎の中では群を抜いてワルだったからな」

神崎「まあね。よくじいちゃんの店で遊んでたね」

定国「ああ、そうだな。なにしてお遊んだ？」

神崎「ほら、ベーゴマして」

定国「ああ、やった、やった。こうしてパーツとして。あれはわしが上手だったな」

神崎「うん、そうそう。あれ、お店はまだやってんの？」

定国「店はもうやめたわ。わしはもうじいさんになったしな、あと継いでくれるもんもおらんし。それよりかな、うちのばあさんがボケていきよん」

神崎「ばあちゃん？」

定国「ボケ。いまだきは、認知症、言うてな。知ってる？」

神崎「知ってる知ってる。えー、大変だね。どっか施設とかに入ってるの？」

定国「いや、申し込みが多いからな、何百人待ちじゃが。それでわしがみよんじゃけどな、さつき見たらまた出てな、おらんのよ」
神崎「え」

定国「徘徊」

神崎「いま？」

定国「いま。徘徊しておらんのよ。この辺におるかなあつて、探しよんじゃけどな」

神崎「警察には言ったの？」

定国「言うたらん。うるさくなるからな」

神崎「じいちゃんだけで探してるの？」

定国「そう、わしだけ。こういうのはな、大袈裟にたくねえが。ふうがわりい」

神崎「おれも探してみようか」

定国「探してくれるか？」

神崎「うん、久しぶりに戻ってきて、ぶらぶらしようと思つてたから」

定国「それじゃ頼むわ」

神崎「うん。なんか、あの、ばあちゃんの着ていた服とかわかる？」

定国「ああ、着てた服か。あのな、もんぺ履いてな、黄色いジャンパー着とる。もうばあさんになつとるからな、よく見ないとわからんで」

神崎「わかった。店はまだあそこにあるんだよね。見つけたらそこに行けばいい？」

定国「まあ、いいわ。見つけたらわしを呼んでくれ」

神崎「わかった」

定国「じゃ、すまんけど、頼むわ」

神崎は辺りを見回すが、それらしき人物はいない。駅前商店街の方面へ歩いていく。

案内人「それでは、神崎くんの後をついていきますので、二列になつてお進みください」

【駅前商店街】

神崎、商店街を歩く。定国の妻を探し、あちこちを見回す。定国の文房具店の前で立ち止まる。入口の戸は半分だけ開いている。

神崎、中に入る。

案内人「中にお入りください」

【定国の文房具店（和気文具）】

店内は何もなく、一角にテーブルとソファが置いてある。テーブルの上には、灰皿、新聞、漫画、飲みかけのお茶。神崎は店内を見回している。

案内人「ここが、定国のじいちゃんのお店です。文房具屋です。じいちゃんと出会ったのは、神崎くんが小学4年生の頃です。夕方、神崎くんが家に帰りがらずに商店街をうろうろしていたとき、店から出てきたじいちゃんが突然話しかけてきました。

『店にマンガ本、沢山あるぞ。来るか』。

店の奥には沢山の古いマンガのコレクションがありました。神崎くんは、放課後になるとこの店で、カムイ伝、ブッタ、うる星やつら、沢山のマンガを読み漁りました。その日課は、中学1年の夏まで続きました」

神崎、店の奥へ行って、

神崎「ばあちゃん」

返事はない。

神崎、外に出る。

【駅前商店街】

神崎、定国の文房具店を出て、さらに商店街を歩いていく。

と、向かいから移住者がやってきて、

移住者「すみません」

神崎「あ、はい」

移住者「こちら辺に眼鏡屋さんってありますか？」

神崎「ああ、眼鏡屋さん」

移住者「はい。これ」

と、真つ二つに割れた眼鏡を出す。

神崎「あー、すごい」

移住者「はは」

神崎「きれいに真つ二つですね」

移住者「子どもが眼鏡を胸のところにつけたら、」

神崎「？」

移住者「なんかブラジャーみたいに」

神崎「ああ」

移住者「そしたらバツキっていつて、こんななっちゃいました」

神崎「……これは直るんですかね」

移住者「あ、ダメですか、やっぱり」

神崎「これは致命傷のような気がしますけど」

移住者「まあ、買い替えるにしても眼鏡屋さんに行かないとなあ、つて」

神崎「あの、その道をまっすぐ行くと交差点があるんですけど、そこを右に曲がると和田時計店っていう時計屋さんがあるんですよ。そこで、たしか眼鏡扱っていたと思うんですけど」

移住者「ありがとうございます！」

神崎「ただ、ぼく、今日ここに20年ぶりに帰省してきたんですよ」

移住者「え、あ、そうなんですか」

神崎「いまここ歩いてきたら、ほとんどの店、閉まってましたからね。だから、もしかしたら……」

移住者「ああー、そうですか。行くだけ行ってみます」

神崎「閉まってたらすみません」

移住者「いえいえ。わたし、こちら辺の地理がわからなくて、あの、移住してきてまだ間もなくて」

神崎「あ、そうなんですか。え、どちらから？」

移住者「千葉です」

神崎「え、ぼくもです、ぼくも千葉です」

移住者「え、千葉！？ 千葉のどちらですか？」

神崎「船橋です」

移住者「わたし、柏です」

神崎「メツチャ近いじゃないですか！」

移住者「うわー、千葉の人に会えて嬉しい！」

神崎「ぼくは、生まれは和気なんです。十代で千葉に出て、それからもうずっと、千葉で就職して、結婚して、子ども産んで、もう千葉人です」

移住者「わたしは、千葉で生まれて千葉で育った、和気人です」

神崎「お子さんは何歳なんですか？」

移住者「息子が、3歳です」

神崎「うちは4歳です。女の子です」

移住者「うちも来週4歳です。すごい。こんな偶然ってあるんですね」

神崎「まだまだ大変な時期ですよ」

移住者「そうですね、うちは主人が千葉で生活しているの」

神崎「あ、そうなんですか」

移住者「ご飯は食べてくれない、お昼寝はしてくれない、眼鏡は壊されるので、大変ですよ。奥さん、労ってくださいね」

神崎「……ああ、はい」

移住者「今日のご実家に帰省ですか？」

神崎「いや、実家はもうないですよ。あの、父親の墓参りで」

移住者「ああ」

神崎「そういえば、こちら辺で黄色いジャンパーを着たおばあさんを見かけませんでしたか？」

移住者「黄色いジャンパーの、おばあさん」

神崎「はい、なんか認知症のおばあさんで、いなくなっちゃったみたいなんですよ」

移住者「あ、見かけました！」

神崎「え、見かけました？」

移住者「はい、昨日」

神崎「あ、昨日ですか」

移住者「はい、昨日」

神崎「あー」

移住者「今日いなくなっただけですか？」

神崎「はい、たぶん。さっき外出て、いなくなった、って言うてたから」

移住者「じゃあ、違う人ですかね」

神崎「どうんな感じでした？」

移住者「ちょうどそこで見かけたんですよ」

神崎「そこ？」

そことは、シャッターの閉まった店舗の前。

移住者「はい、その建物の前に立って、ぼうつとしていたんですよ。で、目が合うとそわそわしながら話しかけてきたんですよ」

神崎「え、なんて」

移住者「なんだっけな、えーと、なんかキモトと、なんとか、なんだっけな、マルナカはやつとらんのかって」

神崎「ああ」

移住者「え、わかります？」

神崎「マルイチですね。マルイチとキモト」

移住者「ああ、そうだったかもしれません」

神崎「そこ、キモトとマルイチという、二つのスーパーが向かい合わせにあったんですよ」

移住者「ああ、そうだったんですかあ」

神崎「だけでも閉店しちゃってますね」

移住者「わたし、意味が分からなかったので、すみませんわかりません、って答えたんですよ。『ほんなら、ほりやはようせんと』

いけんがん』みたいなの？ なんかごによごによ言って、あつちに歩いていっちゃったんですよ」

神崎「へえ」

と、移住者は歩き出す。神崎もついていく。

案内人、観客を誘導する。

移住者「その人なんか、おかしいなって思ったのは、眼鏡を逆さにしてたんですよ」

神崎「え、逆さ？」

移住者「逆さ。あのを、逆さ。ちよつと、いいですか？」

と、移住者は神崎の眼鏡を取るよう促す。

神崎「あ、はい」

移住者「こんな感じで（眼鏡を逆さにする）」

神崎「（その眼鏡をかける）こうですか？」

移住者「はい、最初、逆さにかけてる、って思ったんですけど、そういう掛け方が和気で流行ってるのかな、って思ってる」

神崎「いやいや」

移住者「わたし、そういうことよくあるんですよ。あの、世間の流行についていけなくて取り残されることが」

神崎「でも、さすがにおばあさんの間でこれは流行らないでしょう」

移住者「そうですね」

神崎「まあ、初対面のひとに突っ込めないですよね」

移住者「そうですねですよ。おばあちゃん、真顔でしたから」

間。

移住者「20年ぶりでしたっけ？」

神崎「はい」

移住者「ここらへんの風景はけっこう変わりましたか？」

神崎「変わりましたねー。なんか不思議な感じです」

移住者「不思議ですか」

神崎「知ってるんだけど、知らない町というか」

移住者「ああ」

移住者、シャッターが閉まっている店舗の前で立ち止まる。

移住者「あ、ここで、そのおばあさんがシャッターを叩きはじめ

たんですよ」

神崎「ここですか」

移住者「『テルちゃん、テルちゃんおらんか』って」

神崎「テルちゃん」

移住者「『はよいこうや』って」

神崎「ふーん」

移住者「だからわたし、どこ行かれるんですか？ って声をかけ

たんですよ。そしたら『学校』って言うんですよ」

神崎「学校」

移住者「おばあちゃんになってから通う学校ってあるのかな、って思ったんですけど」

神崎「そうですね」

移住者「でも、授業参観とかのこと言ってるのかな、って」

神崎「あーなるほど」

移住者「そのおばあちゃん、わたしが話しても、なんか、ずっとそわそわしてるんですよ」

神崎「そわそわ」

移住者「はい。『もう待っとれんわ』って言って、ここをまっすぐ歩いていったんです。わたしは、子どもの迎えに行かないといけなかったの、ここを曲がったんです」

間。

移住者「そのおばあさんですかね」

神崎「うーん」

移住者「もうちょっと、なんていうか、声をかけた方がよかったですかね」

神崎「でも、それって難しいですよ」

移住者「……おばあちゃん、無事におうちに帰れたのかなあ」

間。

移住者「なんか、そのおばあちゃんにとつても、知っているんだけど、知らない町だったのかもしれないね」

神崎「ああ」

移住者「迷子にならないでくださいね」

神崎「はい、気をつけます。まあ、何も手がかりがないので、ちよつとそつち行ってみます。時計屋さんはこつちをまっすぐ行って、交差点が見えたら左に曲がったところです」

移住者「ありがとうございます。おばあさん、見つかるといいですね」

神崎「はい。ありがとうございます」

移住者は去っていく。

神崎、商店街を歩いていく。

【神崎のかつての家（セレナ）】

神崎、かつての家が見える場所で立ち止まる。しばらく家を眺めている。

案内人「ここが、神崎くんが住んでいた家です。生まれてから高校3年まで18年間住んでいました。」

子どもの頃、神崎くんが家に帰ろうとしなかったのは、お父さんが原因でした。小学4年生のときにお父さんが脳梗塞で倒れて、これまでのように働くことができなくなってしまいました。

お父さんは癩癩持ちで、脳梗塞を患ってからますます怒りやすくなったようです。怒ると、ものを投げて部屋を滅茶苦茶にして、部屋の片付けがようやく終わったところに、また怒って物を投げて部屋を滅茶苦茶にする、を繰り返していたようです。

今日、神崎くんが和氣に戻ってきた目的は、お父さんの墓参りです。お父さんは8年前に自ら命を絶ちました」

神崎、和氣図書館方面に歩いていく。

案内人「二列になってお進みください」

【周藤の店・屋外】

神崎、周藤の店まで来て、中を覗く。

すると、奥から周藤が出てくる。

周藤「なんじゃろうか、どうされたん？」

神崎「いや、あの、認知症のおばあさんが行方不明になったから、ちよつと、お手伝いで探しているんですけど」

周藤「ええ、そうなん」

神崎「黄色いジャンパーを着たおばあさん、見かけませんでした？」

周藤「うーん、今日はちょっとそういう人は見てねえけどなあ」
神崎「そうですか。ありがとうございます」

周藤「それって、地域包括支援センターとかそんなところに相談してみたん？」

神崎「いや、地域包括……」

周藤「地域包括支援センター。役場の中にあるんじゃないけど、そこに相談したら役場で町内全域に放送を流せるから、それで探してみた方が早いんじゃないかな」

神崎「ああ、そうですか。いや、ぼくもさっきたまたま会った人からお願いされただけなんで」

周藤「そうなん。じゃったら、早めに相談せられて言うてあげた方がええと思うわ」

神崎「ああ、そうですか。はい、わかりました、伝えておきます」
周藤「警察とか消防も検索してくれよるし」

神崎「ああ」

間。

神崎「あの、由美子さんって、まだこちらにいらっしやるんですか？」

周藤「あれ、あんた、由美ちゃんの、お知り合い？」

神崎「はい、あの、同級生だったんですよ。今日、20年ぶりに帰省してきて」

周藤「ああ。わたしな、由美ちゃんの、伯母」

神崎「あ、そうだったんですか。自分、由美さんと幼稚園から一緒に、よく二階で遊んだりしました」

周藤「あら、そうなん。まあ、ちょっと喋っていかれ」

神崎「え」

周藤「20年ぶりに戻ってきたんだから、お茶でも飲んでいかれ」
神崎「ああ、じゃあ……」

周藤、神崎、店の奥へ。

案内人「それでは、中へお入りください」

【周藤の店・屋内】

奥に入ると、椅子に座った周藤ミホがいる。

周藤「お義母さん、由美ちゃんの幼稚園からのお友達」

ミホ「……」

周藤「どうぞ、座って」

神崎「お邪魔します」

神崎、ミホとは離れた場所にある椅子に座る。

周藤、お茶の準備をする。

ミホは神崎のことを訝し気に見ている。

周藤、お茶を持ってやってくる。

神崎「あ、すみません」

周藤「覚えてる？ 豆腐屋のおばあさん」

神崎「あ、はい」

周藤「普段は兄の家で暮らしてるんじゃないけど、デイサービスのな
い日はここで過ごしてるんよ」

神崎「ああ」

周藤「ここが安心するんじゃない？」

周藤、座る。

神崎「由美さんってまだこちらにいらっしやるんですか？」

周藤「……その由美ちゃんじゃがな、4年前に乳がんで亡くなっ
たんよ」

神崎「え……」

周藤「大学卒業したあと大阪で働きよったんじゃないけど、ちょっと
前にかんが見つかって、そっちで治療するよりは故郷に帰ってき
て療養した方がええじゃろって、うちに身を寄せおったんよ」

神崎「ああ」

周藤「いつときは症状も落ち着いておったんじゃないけど、急に悪化
してぽっくり逝ってしもうて」

神崎「そうですか」

周藤「ええ子じゃったんじゃないけどなあ。本人あんまりはつきり言
わなかったけど、お付き合いしよる人もおったみたいなんよ」

神崎「ああ」

間。

神崎「すみません、お忙しいところ邪魔しました」

周藤「あ、ちよっと待たれ」

周藤、立ち上がり、店の戸棚に置いてる写真立てを持ってく
る。

周藤「これなんじゃけどな。これちよっと見てみられ。これな、
由美ちゃんが亡くなる半年前に撮ったもんなんよ。症状が落ち着
いているときの写真」

神崎「……ああ、大人になってますね。当たり前ですけど」

間。

周藤「懐かしいじゃろ。まあ、こうやって人が一人一人のうなっ
ていきや、ここらへんも寂しくなっしもうて。なんかシヤッタ
ー商店街言うてもいいくらいで」

神崎「寂しくなりましたね」

周藤「街に比べたら静かなもんじゃない。うちもな、70年続けて
きたんじゃないけど3年前に店を閉めてしもうて」

神崎「あ、そうだったんですか」

周藤「うちの場合は旦那が外に働きに出よるから食べるのは困らないんですよ。でも、おばあさんがな、店にこだわったから、なかなか閉めるいうて領かなかったんじゃないけど……」

神崎「ああ」

周藤「あなたの家いうて、この近くじゃったんかな？」

神崎「はい、和気高の前です」

周藤「そうなんじゃ。ここらへんでーれー変わつとろ？」

神崎「20年ぶりですから、大分変わってますね」

周藤「わたしが10年前に和気に越してきたときにはもう寂しゅうなつとたんじゃけど、由美ちゃんの話なんか聞きよつたらな、昔はここらへんで土曜夜市やったんじゃないとか、宝くじやったんじゃないのかな」

神崎「その交差点でヒーローショーやってましたからね」

周藤「由美ちゃん、療養でこっちに帰ってきてから、よくここで

店番しよつたんよ」

神崎「そうだったんですか」

周藤「いろいろ昔話してくれたんよ」

神崎「ああ」

周藤「和気はいいところだつて言うつたわ。若い頃は早くここから出て行きたいつて思うつたけど、病気をしてわかった、ここがわたしの居場所なんじゃな、つて。最後の一か月は緩和病棟に入院しよつたんじゃけど、最後の最後は、うちに戻りてえつてことで、連れて帰つとたんよ」

神崎「ああ、ここに」

周藤「うん、最後はうちで」

間。

神崎「4年前ですか」

周藤「そう、4年前の春」

間。

神崎「すみません、お邪魔しました」

周藤「早うおばあちゃん見つけるとええけどな。あ、そうだ。ちよつと待たれ」

神崎「あ、はい」

周藤、奥の部屋に去る。

神崎「……」

ミホが神崎を見ている。

ミホ「……どちらさん？」

神崎「あの、由美子さんの、知り合いです。子どもころの」

ミホ「ああ。あの、由美ちゃんを呼んでくれん」

神崎「え、」

ミホ「上にいると思うから」

神崎「いや、あの、……由美子さんは、亡くなったそうです」

ミホ「え」

神崎「4年前に亡くなってるみたいですよ」

ミホ「亡くなった」

神崎「はい」

ミホ「どちらさん？」

神崎「いや、あの、由美子さんの、友達ですよ」

ミホ「ウソつき」

神崎「え」

ミホ「由美ちゃんを呼んでください」

神崎「いや、だから、いません。いない」

ミホ「由美ちゃん、由美ちゃん、由美ちゃん、」

周藤、パンフレットを手に、戻ってくる。

周藤「どうしたん？」

神崎「いや、すみません、あの、ちょっと」

周藤「お義母さん、由美ちゃんはいま出かけとるんよ」

ミホ「……」

周藤「この人は、お客さん」

ミホ「……お客さん」

周藤「そう。地元の人で今日20年ぶりに戻ってきたんじゃないって」

ミホ「20年ぶり」

周藤「そう。(神崎に)ごめんなあ。ディサービスでもこんな感じで職員さんを困らせばあして」

神崎「……すみません」

周藤「全然気にせんでな。はい、これ」

と、パンフレットを渡す。

周藤「地域包括支援センターのパンフレット」

神崎「あ、ありがとうございます」

周藤「ここに電話すれば対応してくれると思うわ」

神崎「わかりました。すみません、お邪魔しました」

周藤「いえいえ」

神崎「(ミホに)お邪魔しました」

ミホ「……」

周藤「気をつけていかれよ」

神崎、店を出る。

神崎は、ヘッドホンを取り出して、iPhoneで音楽を聴き始める。
神崎は交差点で信号待ちをして、河原へ向かって歩いていく。

【河原】

神崎、河原に降りると、和気富士を見上げる。

案内人「ここが神崎くんのお父さんが亡くなった場所です。平成22年12月15日の深夜、お父さんはこの河川敷にある鉄橋で、首を吊って亡くなりました。65歳でした。」

神崎くんはお父さんの訃報を聞いても帰ろうとしませんでした。肉親が亡くなっても、何が起きようと、彼は二度と和氣に帰らないと決めていました」

神崎、横たわりながら、

神崎「あー」

間。

神崎「なんで、いつも、こう、間違った道ばかり選ぶかな。自分でもわかってんだけどね。絶対うまくいかないって」

間。

神崎「はー」

間。

神崎「自業自得だ」

案内人「わたしも、どうにでもなれって思った」

神崎「……」

案内人「しんちゃんが和氣を出ていくって言ったとき。何言っても無駄なんだもん」

神崎「……ごめん。すげえ泣かせたね」

案内人「すげえ泣かされた」

神崎「由美ちゃん、おれのこと思って言ってくれてたのにね」

案内人「……」

神崎「本当にひどいなって思うよ、いま考えると。高校やめてからも由美ちゃん会ってくれたけど、いつも傷つけることばかり言ってたような気がする」

案内人「わたしがいるから、そんなこと言うのかな、って思った」

神崎「違うよ。そんなことしたくないんだけど、なんか、ね、むしろしゃしゃしてたんだろ？ ね、全に。あれからずっと、そんな感じだよ。間違った道ばかり選んでる」

案内人「……」

神崎「いまもバカなままでごめんね。もうちょっとまともになつて、由美ちゃんとまた会いたかったけど」

案内人「……」

神崎「由美ちゃん死んじゃってるし」

間。

神崎「あれ覚えてる？」

案内人「何」

神崎「もしいつか由美ちゃんに会ったら聞こうって思ってたんだけど」

案内人「うん」

神崎「幼稚園のころかな、同じ組にライオンみたいな男子がいたじゃん」

案内人「ライオン」

神崎「うん、名前忘れちゃったけど、ライオンみたいな。なんか、ライオンで覚えてるんだよね」

案内人「……わかんない」

神崎「なんか、由美ちゃんとそのライオンとおれとで、公園でかくれんぼをしててさ。鬼がライオンで、おれたちが土管みたいなのに隠れてたらさ、由美ちゃんがいきなり大声をあげて、で、ぶーんって音が聞こえるから、なんだって思ったたら、蜂が飛び回っててさ。由美ちゃん泣いてるし、おれ、蜂に刺された人初めて見たからパニックになってさ、公園を飛び出して、だれかー、って大人を探しに行ったんだけど、誰もいなくて」

案内人「……」

神崎「でも、そこまでしか覚えてなくて。おれ、ちゃんと大人を呼んで戻ってきた？」

案内人「……」

神崎「というか、これ本当にあった話？」

案内人「……夢じゃない」

神崎「夢か」

案内人「うん」

神崎「そっか。なんか記憶に残ってたよな」

由美「でも、本当だよ」

神崎「え。……どっち？」

由美「しんちゃんは、自分が思っている以上に、」

神崎、そのときに前方に何かを見つける。

神崎「あれ、ばあちゃん？ ばあちゃん？」

橋の上を黄色いシャツを着た老婆が歩いている。

神崎、全速力で走っていく。

案内人「しんちゃんは、自分が思っている以上に、優しくて頼もしい人なんだよ！」

橋の上を歩く老婆に声を掛ける神崎。

老婆と神崎は何かを話しているがこちらには聞えない。老婆は歩いていく。

定国の妻ではなかったようだ。

神崎、再び商店街へ戻る。

【時計店・屋外】

時計店の前で、店内から出てきた移住者と神崎がすれ違う。

移住者「ああ、ありがとうございました。結局、買い換えることにしました」

神崎「ああ」

移住者「おばあさん見つかりました？」

神崎「いやー、見つからないです」

移住者「心配ですね。わたしも気にしてみます」

神崎「ありがとうございます」

移住者「では」

移住者、立ち去る。

神崎、時計店を通り過ぎる。

【和田のカフェ】

神崎、カフェまで来ると、階段を上がり二階へ。

カフェに入る。

神崎「こんにちは」

和田「いらっしやいませ」

神崎「……」

和田「……神崎くん？」

神崎「そうです。うわー、覚えていてくれた。20年ぶりっすよ」

和田「えー、久しぶりじゃなく。どうしたん？」

神崎「いや、父親の墓参りに。いつの間にか死んでたんで」

和田「あー、親父さんの？ え、いまだここに住んどん？」

神崎「千葉です」

和田「でえれえ遠いなあ！ お母さんは広島よな」

神崎「そうです。……和田さん、全然変わってないっすね」

和田「そう？ まあ、みんなに言われるけどな」

神崎「いや、カフェが出来てるから、びっくりしました」

和田「2年前まで岡山でサラリーマンしてたんだけど、もう自分の好きなことした方がいいかなって思って」

神崎「かっこいいすね」

和田「そんなことないって」

神崎「結婚したんですか？」

和田「うん、もちろん。……一人だよ」

神崎「変わらないっすねー」

和田「そっちは？」

神崎「あの、3年前に結婚して、ガキも生まれたんですけど、……

……いま、離婚を迫られているところでした」

和田「マジで？」

神崎「マジっす」

和田「どうしたん？」

神崎「いや、……これ（小指立てる）」

和田「やるなく！」

神崎「もうすげえゴタゴタしてて」

和田「うらやましいわ」

神崎「いま、家族捨てて、仕事やめて、蒸発中。いいでしょ？」

和田「……うーん、今日飲むか」

神崎「いや、そんな気分になれなくて」

和田「いや、普通に飲もうよ。久しぶりじゃし」

神崎「……ありがとうございます。なんか、もういやんなちゃって。年取ると、あれですね、自分の親父に似てきますね」

和田「ああ」

神崎「ムチャクチャな人でしたけど」

和田「じゃよな、自分、いっつも親父さんの悪口よーったもんな」

神崎「だから、ちょっと、親父の墓参りをして、自分を見つめ直すうかなって」

和田「そっか」

間。

神崎「はー」

和田「ま、ま、元気だして。コーヒでええ？」

神崎「あ、そうだ。定国のじいちゃん、さっきばあちゃん探してたんですけど、見かけませんでした？」

和田「ああ……。それ、じいちゃんが言いよったん？」

神崎「はい、なんか、ばあちゃん、ボケちゃったみたいですね」

和田「……そっかあ」

神崎「なんすか」

和田「いや、ばあちゃん、……死んでおらんよ」

神崎「え」

和田「二年ぐらい前から、ばあちゃん、徘徊ばーしだしてな、よーわいらあも消防やこうで探しに回ってそのたんびに見つかりよーったけど、去年の冬じゃったな……。全然見つからんな。二日ぐれー経って日笠の河原の土手でな、」

神崎「日笠」

和田「うん、そこまで歩いていったんじゃろうな。草むらの中で倒れとったんじゃ」

神崎「じゃあ、じいちゃんは……」

和田「せーからじゃな、じいちゃんがボケたのは。よー徘徊してありもしねーこと喋りだしたんは……。ばあちゃんが死んだの認めとーねんじゃろうなあ」

神崎「……」

和田「もーじゃけど、一人暮らしは限界じゃでー」

神崎「……でも、じいちゃん俺のこと覚えていましたよ」

和田「マジで。おれのことなんか全然じゃからよ」

神崎「そうなんですか」

和田「ここ乾物屋だと思とるから」

神崎「乾物屋ですか」

和田「こないだもここにスルメを買いにきた」

神崎「マジすか」

和田「まじまじ」

神崎「……そっか、ばあちゃんいないんすか」

間。

和田「今日はこれからどうすん？」

神崎「これから墓参りに」

和田「ほんなら、久しぶりに飲もうや。市川さんも呼ぶけん」

神崎「いや、すみません、大丈夫です」

和田「え、なんで、せっかく」

神崎「すみません。一人になりたくて和氣に戻ってきたので」

和田「でも、コーヒーは飲んでくよな？」

神崎「急いでるんで」

和田「そっか」

神崎「本当にすみません」

和田「いやいや。まあ、気が変わったらいいつでも連絡くれよな」

神崎「ありがとうございます」

和田「寄ってくれてありがとう」

神崎、カフェを出る。

【路地】

神崎、路地を歩いていると、後方から定国が歩いて来る。

定国「あ、しんちゃん！」

神崎「……あの、ばあちゃん探したんだけど、ばあちゃん、見つからなかった。ごめんね、じいちゃんの力になれなくて」

定国「はあ？ ばあちゃんはおったがん」

神崎「え」

定国「ばあちゃん、家におった。家でいつもの椅子に座っとった」

神崎「……あ、そう。よかったね。おれき、親父の墓参りに行かないといけないから、そろそろ行くわ。じいちゃんに久しぶりに会えてよかった。うん。身体に気をつけて」

定国「いや、ちよつと待て。しんちゃん、今日はうちでな、カレーライス食べてけ」

神崎「カレーライス？」

定国「昨日の夕べ作ったのがあるから。にんじん、たまねぎ、じやがいも、牛肉、ぼっけえ入れたんよ。うめえぞ」

神崎「いや、おれ急いでるから」

定国「ええがん、久しぶりなんじゃから」

神崎「ごめん」

定国「夜道に日は暮れない」

神崎「……」

定国「しんちゃん、今日はうちでゆっくりしてけ。な」

神崎「……そしたら、うん、わかった」

定国「よし、ばあさんもな、しんちゃんに会えたら驚くぞ。あのガキ太郎がおじさんになってるんだからな」

神崎「……」

定国「あ、そうじゃそうじゃ、今日は和氣の祭りじゃ」

神崎「え、祭り？」

定国「これから神輿がくるで」

神崎「こんな寒い時期に祭りがあるの？」

定国「今日はよい祭りで、明日が本番。ちようどええわ。太鼓が鳴るわあ」

神崎「……じいちゃん、太鼓うまかったよね」

定国「そうじゃな、しんちゃんにもよう太鼓教えたが。そうじゃそうじゃ。昔よう歌った歌で、祭りの歌があったな」

定国、「村祭り」を歌う。

神崎と定国、文房具屋に向って歩く。

【定国の文房店（和氣文具）】

神崎、定国、店内に入ってくる。

定国「帰ったよー」

定国、奥へ行く。

神崎はソファアに座る。テーブルに置いてある漫画を手にとつて読み始める。

しばらくして、定国、戻ってくる。

定国「……しんちゃん、ばあちゃんがまたおらんくなった」

神崎「ああ」

定国「さっきまでそこに座ってたのにな」

神崎「……一緒に探そうか？」

定国「いい、いい。あとは一人で探すから。しんちゃんも忙しかろ」

神崎「いや、別に」

定国「いや、気をつかわんでええ」

神崎「今日はじいちゃんに付き合うよ。夜道に日は暮れない」

定国「ハハ。ありがとな、しんちゃん」

神崎「あ、そうだ。探す前にさ、まんじゅう食べる？」

定国「まんじゅう」

神崎「うん」

神崎、リュックサックからまんじゅうを取り出す。

神崎「うちの親父がよく食べてたやつだけど」

定国「おー、うまそうだな。わしはな、子どもの頃からまんじゅうが大好きなんよ」

神崎「じいちゃん、甘党だったよね」

定国「そうそう」

神崎、定国、まんじゅうを食べ始める。

定国「うめー」

神崎「うまいね」

神崎、お茶を入れる。

神崎「年取ると大変だね。ばあちゃんのこととか」

定国「そうだな、90年も生きると大変なことばかりだな。ばあさんともしょつちゅうケンカをする」

神崎「そっか。……おれも大変なんだよね。離婚するかもしれないんだけど」

定国「うん？ なんだった？」

神崎「離婚するかもしれないの」

定国「なんで」

神崎「いや、他の人と」

定国「おまえがか。浮気だな？」

神崎「まあ」

定国「……まんじゅうがまずくなった。しんちゃん、嫁さんのことを愛してるんか」

神崎「え。……愛してる？」

定国「愛してるんか」

神崎「いや、それは、……え、じいちゃんは？」

定国「え」

神崎「じいちゃんは、ばあちゃんのことを愛してるの？」

定国「え、……この歳になると、ハハ、恥ずかしいな」

神崎「……」

定国「まあ、若い頃は愛してたな。いまは、愛してるのか愛してないのか、うーん、わからんな」

神崎「……あ、そう」

定国「でもな、この間、老人ホームから電話があつてな、奥さんの老人ホームの順番が近づいてきました、って言ってきて、はっと思つた。というの、老人ホームは終末の家、そこに行ったらもう戻れない。わかる？」

神崎「……うん」

定国「で、ばあさんの順番が近づいたら、喜ぶかなと思つたら、全然違うんよ。寂しい。いたらいたで喧嘩するけど、いなくなつたら寂しいんよ」

神崎「うーん、そうかあ」

定国「それでな、老人ホームを断つた」

神崎「そっか。いなくなつたら寂しいってことは、愛してるのかな」

定国「まあ、そうだろうな。お前は嫁さん愛してるのか？」

神崎「……うん」

定国「そしたらな、絶対に手放すな。わしも手放さない。手放せない」

神崎「うん。……そしたら、ばあちゃん、探さないだね」

定国「しんちゃん、ありがとな」

遠くから祭りの音が聞こえてくる。

神崎 「あれ、祭り？　じいちゃん、太鼓の音が聞こえてきた」

定国 「え。おお、そうだそうだ、今日は祭りじゃ」

神崎 「ホントに祭りだったんだ」

定国 「そうだよ、今日は宵祭り」

神崎 「じいちゃん、外出てみようか」

定国 「おお、そうだな。まんじゅうも食べたいけど……、行こうか」

神崎 「窓の外をみて」じいちゃん、神輿！　神輿がきた！」

定国 「おお。もう来たか」

二人、「村祭り」を歌いながら外に出ていく。

終わり